



# 新たな出発

---

## 性転換

---

春日信彦

---

## マー جان

糸島中学の数学と国語における学力は年々低下している。篠田教頭は福岡県教育委員会に働きかけ、指導力に秀でた数学教師を依頼した。教育委員会は理工系の名門、桂学園に働きかけ、優秀な数学教師を選抜してもらった。それにより、5月に赴任してきた数学教師のルーシー先生は1年と2年の習熟度Cクラスを担当することになった。習熟度クラスはA.B.Cの3クラスある。ルーシー先生は学力低下に関する論評はほとんど読んでいた。時々、それを思い出しては芸術としての数楽授業を実践していた。

A心理学者は言う。今の若者は生まれてまもなくからゲームをやっている。もはや、21世紀はゲームの時代と言える。生まれてすぐに、お兄ちゃんやお姉ちゃんがやっているゲームの音を聞き、指先が使えるようになると夢中になってゲームにのめりこんでいく。ゲームは言語中枢の発達を遅らせ、さらに、無味乾燥な記号に対するアレルギーの原因となっている。生後直後からのゲーム生活が今後も続くようであれば、日本人総白痴のお恐れがある。学力低下の原因が、ゲームにあるとの確証はない。だが、確かにゲームの普及と学力の低下には時期的一致が見られる。

K教育評論家は言う。数学力を低下させているのは、大学受験のための高校授業にある。私立文系を志望する学生が急激に増加し、高校ではほとんど数学を勉強していない。形式上単位を与えて、数学の授業時間に英語や社会の授業をやっている私立高校が増加している。少子化がますます激化する現在、私立高校は名門大学の合格実績を上げるため、このような悪質な教育をやっている。

ともあれ、いかなる理由があるにせよ、分数の足し算、掛け算ができない私立文系の学生が近年急激に増加している。果たして、彼らを大学生と呼んでよいのだろうか？算数もろくにできない大学生が日本の企業戦士となりうるのだろうか？日本の政治家になりうるのだろうか？今、悲観的なことばかりを指摘したが、日本には世界に誇れる優秀な生徒がたくさんいる。彼らは、大学にいるのではなく、専門学校にいる。

優秀な学生の動向は変化し始めている。名門大学から名門専門学校へと秀才は舵を切り変え始めている。彼らは、価値を失った学歴にではなく、就職において高く評価される資格取得に教育資金を投資すべきだと考えている。現に、企業は有資格者を優先的に採用している。大学生の学力低下と学歴の価値低下は今後激しくなると考えられる。仕事が専門化する現代において、企業が必要とする能力を考えると、教育制度を今一度考える時期にきたといえる。

B社会学者は言う。近年、ますます、貧富の差が大きくなってきている。その結果、富裕層と貧困層では教育に投資できる資金に大きな差が出ている。私立の中高一貫校や塾に通わせるための資金を確保できるのは富裕層といえる。現に、東大合格者の大半は私立高校出身者である。親の資金力が子供の学力までも左右している資本主義経済国家においては、経済力と学力は比例していることになる。

貧困層がますます拡大している今、国民の学力低下は深刻な問題である。多くの国民は政治を理解する能力を失い、一握りのエリートたちの奴隷と化してしまう。現に、アメリカではこの現象が現実のものとなり、9割を占める貧困層は医療も満足に受けられず、正当な教育も受けられない状態に陥ってしまった。日本のTPP参加は、このアメリカ資本主義を日本に導入することになり、貧困層を拡大し、更なる学力低下を招くことになる。

H文学者は言う。日本から文学は消えていく。機械的記憶力を訓練する受験勉強は、若者の知的好奇心を失わせている。知的好奇心は物事を疑うことから始まる。ところが、現在の受験戦争においては、教科書に書いてあることを疑うことは記憶にマイナスとなってしまう。そのため、優秀な学生ほど、与えられた内容を疑おうとしない。疑うという行為は、直接、試験の点数に結びつかないからだ。

本来ならば、一流の大学から、革命的な文学者が輩出されるべきだが、この兆候はまったく見られない。多くの秀才たちは模倣の特訓を受け、金儲けのための詭弁的な評論家にはなりえても、もはや、独創的な革新的な文学者にはなりえない。文学は、人間の心を探求するものであって、決して、金儲けの手段であってはならない。だが、現実には、秀才が生み出す作品は金儲けのための、読者を喜ばすための、ビジネス本と成り果ててしまった。

若者にとって必要な教育は、“疑うこと”が創造の原動力であることを気づかせることだ。文学は生きるために必要な“心”の形成に役立ってきた。お互いの“心”を尊重するという気持ちを基盤とした社会を作るためにも、秀才は本来の文学に目覚めてほしい。科学が“心”を失ってしまえば、それは凶器となってしまう。幸福の創造に貢献してきた科学は、一部の秀才たちの狂気によって、悪用されている。日本の秀才には狂気に負けない“心”を身に着けてほしいと願う。

K 芸能評論家は言う。話芸はどこに行ってしまったのか？今、日本に文化といえるものはあるのだろうか？映画もテレビも視覚的快楽を与える感覚的映像製作をやっている。さらにあきれるのは、お馬鹿人気だ。馬鹿を演じるアイドルがもてはやされる。常識のある大人が冗談で非常識なことを言うのであれば、気楽に笑って楽しめる。だが、常識そのものがない芸能人、学校教育をまともに受けていない芸能人が増え続けている。

彼らは冗談ではなく、平然と非常識なことを言っている。と言うか、常識となる基本的な知識がないのだ。最近の若い芸能人は子供のころから芸能活動をやっているため、基礎的な一般常識を習得する機会が与えられていない。やはり気になるのが、小中学生の芸能活動は児童労働ということだ。おそらく、芸能界でもっとも利益を得ているのは、中学生から高校生の若者だ。アイドルユニットはますます低年齢化している。

ゲームとアイドルユニットは、もはや若者にとって欠かすことのできない娯楽となっている。将棋、囲碁、落語、読書、などが知的娯楽で、ゲーム、アイドルが反知的娯楽と決め付けては語弊があるが、思考力を鍛える点のみを考えると、やはり、ゲーム、アイドルは思考力向上には役に立たないようだ。若者の娯楽は、いったい何を意味しているのか？冷ややかな目で見てみると、暗い未来を反映しているのではないか？

今の学校教育が自分の将来を築いているんだ、と確信できれば、もっと、学習に情熱を注ぐに違いない。だが、エリートとなれる大学に入れる子供たちは限られている。また、就職難のため、大学を卒業しても、それに見合う仕事には就けない。こういう現実を目の当たりにして、受験勉強に情熱を傾けられるだろうか？暗い将来を考えるより、今を楽しみたいと思うのは当然といえる。



今のテレビ番組は、退廃的だといわざるを得ない。テレビ、映画は国民の心を大きく動かすメディアだ。もっと、スポンサーやプロデューサーは、若者の心を考えた作品制作を心がけてほしい。営利主義を回避できないが、若者の知的好奇心を駆り立てる作品を多く作ってもらいたい。“学問”をするとは、学校での受験勉強だけではなく、テレビ、映画、読書も有効な学問手段であることを、今一度、大人たちが気づいてほしい。

脳機能学者は言う。ほとんどの人は脳を十分に使わずにニューロンを死滅させている。いかなる人も左脳と右脳と使いこなせば、秀才となりうる。学力低下が今、深刻な問題となっているが、現在の学校教育のやり方、言い換えると、機械的な言語記憶により左脳言語中枢をフルに機能させ、言語記憶ニューロン回路を形成させる受験勉強。このような受験勉強による脳の活用は、一部の秀才を除いて、多くの学生は言語記憶ニューロン機能の限界を実感し、さらに、うつ病にもなりかねない自信喪失に陥ってしまう。

脳を最大限に機能させるためには、常に創造的言語活動とイメージ活動が必要とされる。誰しも、このことはたやすく理解できる。赤ちゃんは親の言葉を記憶し、真似るだけでなく、多くの言葉を創造していく。まさに、これが脳の特徴なのです。言葉の創造やイメージの創造を毎日やっていけば、左脳も右脳も機能するようになるのです。大切なことは、小学校の授業から、子供たちに自由に議論する時間を与え、自由に作文する時間を与えることが不可欠なのです。

現在の学校教育において、アイデア、ひらめき、発想、といった個性を高く評価する授業は行われていない。ご存知のように、与えられたことを記憶するという、記憶評価授業です。当然、中高大入試もデータ記憶を採点するものです。対策として、ゆとり教育の名目で考える授業を取り入れている学校もありますが、内容は応用問題をやらせているに過ぎません。脳の本来の成長を促すのは、“採点されないこと”なのです。

つまり、採点されない授業が一番大切なのです。アイデア、ひらめき、発想といった個性の創造は採点されてはならないのです。いかなる作文も、いかなる絵も、いかなる歌も、いかなる演奏も、いかなる議論も、採点はいらないのです。こういう授業を実践していけば、いかなる子供でも脳は発達していくのです。脳を活用するとは、言語を記憶するだけではないのです。採点する授業も必要ですが、採点しない授業を取り入れたならば、きっと、多くの子供たちの脳は最大限に有効利用されることでしょう。

ルーシー先生は脳機能学者の採点しない授業に心を引かれた。採点する授業と採点しない授業を半分ずつすることを考えた。採点する授業は通常の授業を行い、採点しない授業に何をするか悩んだが、結局、マーじゃんをすることにした。マージャンの発想は亜紀の喜んだ顔が浮かんだからだ。亜紀にはいろんなゲームを教えた。囲碁、将棋、チェス、トランプ、マージャン、手品、ビリヤード、ダーツ、など気の向くまま教えたところ、亜紀が一番喜んだのはマージャンだった。

マージャンは確かに面白いが、ちょっと困ったことに、賭け事、ばくちとかかかわっている点だ。ルーシー先生は悩んだ。果たして、篠田教頭がマージャン授業を認めてくれるか？ルーシー先生は篠田教頭に話す前に、1年生の意見を聞いてみることにした。1年の習熟度Cクラスはかなりレベルが低く、また、学習意欲に欠けていた。彼らに学習意欲を持たせるには、単に通常の授業でスパルタ的に計算特訓してもまったく効果が上がらないと考えていた。

早速、生徒たちの意見を聞いてみることにした。ルーシー先生は落ち着きのない生徒を怒鳴らずにゆっくりとやさしく話しかけた。「みんな、数楽はお休みにして、今日は楽しい話をします。みんなは、お家に帰ると、きっとゲームをやっていると思うんだけど、ゲームは先生も大好きです。そこで、数楽の授業にゲームを取り入れることを考えてみました。ゲームというのは、マージャンです。みんなはどう思うか、意見を聞かせてください」ルーシー先生は笑顔で話しかけた。

ほとんどの生徒たちは話をやめて聞き入っていたが、マージャンと聞いて私語をする生徒が現れた。穴井が緊張した表情で手を上げた。「先生、マージャンって、あのマージャンですか？」穴井は聞いたことのあるマージャンか確かめた。ルーシー先生は、マージャンは一つしかないので、断言するように、大きな声で返事した。「そうです、皆さんがよく知っている、マージャンです。大人は、賭けマージャンをやっていますが、私たちは、学習としてのマージャンゲームをやります。頭のトレーニングにはもってこいのゲームです」ルーシー先生は、誤解されないように補足説明を加えた。

穴井は手を上げず、すっと立ち上がった。「先生、マージャンは、博打の一つじゃないですか？子供はやるべきじゃないと思います。お母さんに話せば、きっと反対されます」穴井は顔を真っ赤にして話し終わるとすぐに着席した。ルーシー先生はこのような意見が出ることを予想していた。「みんな、マージャンは博打の一つかもしれませんが、でも、マージャンはゲームの一つで、賭けをしなければ、健全なゲームです。私たちは、マージャンを通して、計算力、思考力、洞察力、を鍛えることができます。本当に、伝統的な、知的ゲームですよ」ルーシー先生は冷静に話しかけた。

大野が手を上げた。即座に、立ち上がった。「俺は、賛成です。マージャンは面白いし、お金をかけなければいいと思います」大野はマージャンの経験があり、家族でマージャンをやっていた。ルーシー先生は賛成してくれる生徒がいてほっとした。「大野君は賛成ですね。他に、意見はありませんか？」ルーシー先生はみんなを見回した。穴井がまた、立ち上がった。「学校は絶対反対すると思います。PTAも反対すると思います」穴井は即座に着席した。穴井の母親はかつて小学校のPTA会長をやっていた。親たちは絶対反対すると直感した。

ルーシー先生がもっとも気にかけていたことをずばり発言した。動悸が少し激しくなったが、落ち着くように自分に言い聞かせ、ゆっくりと話しはじめた。「穴井さんの意見はもっともです。先生も反対されると思っています。でも、マージャンはみんなの学力にプラスになることだと確信しています。もし、みんなが賛成してくれるなら、反対されても、断固戦って、マージャンがやれるように、学校とPTAを説得します。みんなは賛成してくれますか？」生徒たちはしばらく黙っていた。

数人を除いて、多くの生徒たちはマージャンの経験がなかった。マージャンは大人の遊びで、子供のやるゲームではないと思っている生徒がほとんどだった。植木が立ち上がった。「マージャンって、本当に面白いのですか？難しいんじゃないですか？」植木は、ゲームは得意ではなかった。多田が立ち上がった。「マージャンをやったことがある人、ちょっと意見を聞かせてほしいです。やったことがない人がほとんどだと思います」多田はマージャンといわれても意見が言えなかった。

大野が立ち上がった。「僕は何度もやったことがあります。でも、家族みんなでやっているだけで、賭けマージャンはやっていません。マージャンを簡単に言えば、絵柄を組み合わせるゲームで、4人でやるゲームです。とても面白いゲームです」大野はずばりポイントを話した。桜井が立ち上がった。「僕もオンラインでやったことがあります。将棋も面白いけど、マージャンは運がいいとき、面白いように勝てます。やると、ハマります。勉強なんかよりずっと面白い！僕は賛成です」桜井は大きな声で賛成を呼びかけるように話した。

しばらく、みんな黙っていたが、ぽつぽつと賛成の声が出始めた。桜井の勉強よりも面白いといった一言がみんなの心を動かした。ルーシー先生は確認を取った。「みんな、賛成ですね、賛成の人、手を挙げて」生徒全員が手を挙げた。マージャン授業を決心したルーシー先生は、生徒に自習を指示し、早速、教頭の了解を得るために直談判に行った。

## 性転換

ドクターは1月に2回ルーシーの心の変化を確認するために糸島市志摩にある安部医科大学付属病院にやってくる。今日は、ドクターがやってくる日であった。地下1階にある理事長室の純白のソファに腰掛けた二人はお互いの服装を見つめた。ドクターはアイボリーのシルクシャツとブルーと臙脂のチェック柄のウールスラックス、ルーシーはひざ上のノースリーブの花柄ワンピース。ドクターは色っぽくなったルーシーに笑顔で話しかけた。



「ルーシー、体調には問題ありませんか？」問題はないと確信していたが、ドクターは念のために体調の変化を確認した。「問題はありません。ホルモン剤はうまく効いているみたいですよ。身体は脂肪で柔らかくなり、丸みのある女性のシルエットになってきました。その上、肌がすべすべになって、色気も出てきたみたいです。声もキーが高くなって、まさに、女性の美声です」ルーシーは順調に女性化していることを明るい声で報告した。

ドクターは頷くと心について確認した。「気持ちの変化ですが、男性への好意が出てきましたか？素直に教えてください」ルーシーは心の変化にはまだ実感がなかった。「心の変化は、よくわかりません。女としての立ち振る舞いに好感が持てるようになってきました。話し方も女性らしくなって来ました。女性の身体に馴染んできたと言うより、自信がついてきました」ルーシーは性転換の成功をほのめかした。

「ルーシー、体調には問題ありませんか？」問題はないと確信していたが、ドクターは念のために体調の変化を確認した。「問題はありません。ホルモン剤はうまく効いているみたいですよ。身体は脂肪で柔らかくなり、丸みのある女性のシルエットになってきました。その上、肌がすべすべになって、色気も出てきたみたいです。声もキーが高くなって、まさに、女性の美声です」ルーシーは順調に女性化していることを明るい声で報告した。

ドクターは頷くと心について確認した。「気持ちの変化ですが、男性への好意が出てきましたか？素直に教えてください」ルーシーは心の変化にはまだ実感がなかった。「心の変化は、よくわかりません。女としての立ち振る舞いに好感が持てるようになってきました。話し方も女性らしくなって来ました。女性の身体に馴染んできたと言うより、自信がついてきました」ルーシーは性転換の成功をほのめかした。

顔の整形、豊胸、女性器の新設により拓也は女性に変わった。男性との性行為も結婚も可能となった。ただし、排卵と子宮がないため妊娠は不可能。身体的には女性になったが、心がどこまで女性化するかが課題であった。ドクターは男性との恋愛と女性への嫉妬に関する情報を詳細に手に入れたかった。「男性とキスしたいという衝動はまだありませんか？」ドクターは男性脳から女性脳への変化を細かにチェックし始めた。

ルーシーは少し悩むような表情で答えた。「確かに、かつての男同士の敵対的な闘志はなくなっただと思います。でも、まだ、男性にキスしたいとか、抱かれないとか言う、気持ちはまだ起きません。あ、そう、化粧がとても楽しくなりました。美しくなることへの欲というか、願望が強く湧いてきました。今は、より美しくなりたいという気持ちでいっぱいです。エステにも行ってみたいと思っています」ルーシーは美への心の変化を訴えた。

ドクターは大きく頷くと笑顔で話しはじめた。「そうですか、美への願望が湧いてきましたか、それはすばらしい。女性脳が徐々に形成されている証拠です。女性脳をより形成促進するために、美容体操やダンスもやられてもいいかもしれませんね。最近、赤ちゃんを見られましたか？もし見られていたら、とてもかわいいと思う気持ちがありましたか？」ドクターはかわいいものを好む母性意識のチェックをした。

ルーシーも女性として生きていく自信がわいてきていた。当初は、本当に新薬が女性脳を作ることができるか疑っていたが、最近の肌の美しさや色気のすばらしさ、さらに美意識の高揚を実感するにつれて、身体も心も女性になれると確信できるようになって来た。「赤ちゃんを見る機会はありませんでしたが、子供たちと一緒にいることがとても楽しくなりました。今、とても生き生きしているんです。女性として美しくありたい、そして、女性として活躍したいと思えるようになって来ました。もうしばらくすれば、恋愛もできるんじゃないかと、わくわくしています。」ルーシーは女性になった喜びを大げさに話した。

ドクターは新薬の効果が確かなものであることに満足した。ドクターは声のトーンを変えると話を変えた。「それでは、本題に入りますか。最新情報ですが、近々、テロが起きますよ」ドクターは脅かすかのように緊張した顔で話した。「テロですか？今度はどこですか？今度はどこと戦争する気ですかね。9.11の自作自演はバレバレじゃないですか。いい加減にしてほしいもんですわ」ルーシーはあきれた顔でジャスミンティーを一口すすった。

ドクターはさらに顔を緊張させ、目を吊り上げて話し始めた。「どこだと思う、聞いて腰を抜かさないでくれ、東京だ。しかも、霞ヶ関ビルにテロだ。9.11と同じように、飛行機を突っ込ませるようだ。彼らは狂人といしか言いようがない。しかも、テロの犯人を中国人と報道するらしい」ドクターもあきれた顔でジャスミンティーを一口すすった。東京と聞いたルーシーは、一瞬顔を引きたらせたが、落ち着いた声で話し始めた。

「中国人のテロですか、目的は国防軍の軍事力の強化ですね。日本に高額な武器をどんどん購入しろ、と脅しをかけてくるわけですね。戦争ビジネスに狂った彼らを野放しにしていたら、地球は破滅してしまいますわね。こういうやからは、暗殺しかありませんわね、ドクター」ルーシーは右手に拳骨を作っていた。ドクターは両手に拳骨を作り、話し始めた。

「終戦記念日8月15日、午前9時、福岡市役所にS国防長官がニューヨークからやってくる。K総理とE福岡市長の三者会談を行うことになっている。午後2時には東京に向かう。東京で閣僚たちと会談後、銀座のクラブで夜を明かす。16日、午前10時には帰国する。チャンスは一回だけだ。そこで、ルーシーに頼みがある」ドクターは暗殺をほのめかした。ルーシーは両手を膝の上においてじっと聞いていた。

「暗殺ですね」ルーシーはドクターの言いたいことを先に言った。「察しがいいですね。これを見てください」ドクターは手のひらの上に乗せた小さなものをルーシーの目の前に差し出した。ルーシーは目を近づけじっと見つめた。「いったい、これは何ですか？」はじめてみる奇妙なものを指で触ろうとした。ドクターは即座に手のひらを引っ込めた。「危ないところだった、もう少しで、あの世に行くところでしたよ」ドクターは冗談めかして言った。

「いったいどういうことですか？あの世に行くとは？」ルーシーは意味のわからない冗談にムカついた。「いや、冗談じゃなく、本当なんです。この小さい物質の先をよーく、見てください。トゲのようなものがあるでしょう。このトゲには神経毒が塗られているのです。しかも、この毒の致死量は、0.01グラムなんですよ。このトゲに刺さると、1時間後に心不全で天国に行くことになります。すごいでしょ」ドクターは手のひらに乗せた小さな物質をルーシーに近づけて見せた。

ルーシーは一瞬身を引いたが、これをどのように使うか質問した。「いったい、こんなちっちゃいものをどう使うんですか？」このちっちゃい武器をじろじろ見つめた。「これは手のひらに載せて使うんです。つまり、トゲのある手のひらで握手するんですよ。国防長官とです」ドクターはニコッと笑顔を作った。ルーシーも納得したように笑顔を作った。「握手するチャンスはありますか？国防長官と」ルーシーは眉間を寄せた。

ドクターはドヤ顔を作ると、小さな声で話し始めた。「国防長官は必ず銀座のクラブ、ブラックパーズに行くはずですよ。そこで、ルーシーの出番です。ルーシーはホステスになって潜入してください。国防長官がクラブを出るときがチャンスです。彼と親愛の握手をするのです。1時間後の天国のために」ドクターは笑顔で話し終えた。ルーシーは大きく頷くと、笑顔を返した。



## 新たな出発

近藤ヒカル監督は、事務所を新宿区から福岡市中洲に移していた。A V撮影は助監督にすべて任せ、彼は念願のスパイ映画に取り組んでいた。政府の知能犯を相手に活躍する警視庁の特捜部隊の物語だ。主人公は松本隼人、彼を取り巻く女性スパイ、田中舞、中西さち、下野かおり。撮影は順調に進んでおり、今日は二見ヶ浦での撮影に入っていた。ここはフルシーズンサーファーたちでにぎわっており、夕日がきれいなところである。

撮影内容は、松本が糸島市の志摩に里帰りをし、彼女たちと一緒にサーフィンを楽しむシーンである。サーフィンを楽しんでいた若者たちのエキストラとしての参加があり、3カットでこの撮影を終えた。早めに撮影が終わり、スタッフと役者は自由時間となった。監督はサンセットロード沿いのナイスビュー・レストランでコーヒーを飲みながら、夫婦岩を眺めていた。

少し坂を上った丘の上に位置するこのレストランでは、定期的にライブも行われていた。ドリンク付1500円、開演時間；5時、出演者、シンガーソングライターの野笙子（福岡芸大2年生）と表示されていた。是非、生ライブを聞きたかったが、腕時計を見ると、針はまだ2時半過ぎをさしていた。それまでの時間をどう潰そうかと考えていた。そのとき、ドアのベルの音がリンリン・・・と鳴った。二人の女性と小学生低学年と思われる女の子が笑顔で入ってきた。

監督は一瞬目を疑った。少し太ったAV女優アンナの姿が目飛び込んできたからだ。じっと見つめていると、三人は窓際の予約席に腰掛けた。アンナは監督から見ると後ろ姿となったため、声をかけづらくなった。目が合えば、跳んでいって挨拶するところだったが、なんとなく気まづくなってしまった。じろじろ見つめると変に思われると思い、サーフボードを抱えた浜辺のサーファーたちに目を移した。

海を眺めていると、カメラの前で横たわっているアンナのピチピチした姿態が目には浮かんできた。監督はまだ東京でAVをやっていると思っていた。今ここにいるということは、AVをやめたと考えられた。福岡のこんな片田舎にどうして居るんだろうと不思議に思え始めた。脳裏にあるアンナはスリムで、もっと気取っていた。今さっき見た彼女は普通のOLのようで、女優の雰囲気はまったくない。やはり、見間違いなのではと監督は思い始めた。

世の中にはよく似た人はたくさんいる。こんなところにアンナがいるはずがない。監督は心でつぶやき、眼下の駐車場にとめていた愛車の赤いコルベットを横目で見ると、すっと席を立った。ライブまでの時間つぶしに、観光地の糸島市をドライブすることにした。監督はレジに向かう途中もう一度、彼女に目を向けた。そのとき、彼女の目は監督を捉えた。彼女は声を発した。「監督！アンナです」アンナは席を立って監督に駆け寄った。

アンナは監督の肩を勢いよく叩いた。「アンナです。忘れたんですか？」笑顔で声を張り上げた。会話を楽しんでいた中央テーブルのお客が、二人をじろっと見つめた。監督は見間違いではなかったと安心し、言葉を返した。「ここでは何だから、アンナさんのテーブルに参りましょう」監督はアンナの背中を押すように窓際のテーブルに向かって歩き始めた。テーブルの横に着くと、監督は簡単に自己紹介した。

「かつて、アンナさんを撮影していた監督の近藤と申します。よろしく」監督が笑顔を作ると、さやかはアンナの横の椅子を指差した。「近藤さん、こちらに、おかけになってください。私たちは1年ほど前にこの糸島市に引っ越してきたんです」監督は席に着くと三人をさっと見た。「そうでしたか、まさか、こんなところでアンナさんにお会いできるとは奇遇ですよ。私も東京から中州に事務所を移して映画の仕事をしています。今日はロケの撮影で二見ヶ浦にやってきました」

監督は話し終わるとアンナの顔をそっと見た。アンナは笑顔を作ると話し始めた。「ちょっと太ったから、人違いと思ったでしょう。いま、妊娠しているんです」アンナはお腹に手を置いて話した。「へ～、アンナさんは結婚なされたんですね。それは、おめでとうございます。寿退社でしたか」監督は目じりを下げて、ほんの少し頭を下げた。アンナは右手でお腹をさすりながら、気落ちした声で話し始めた。

「それが、まあ、こんなところで話すことではないと思うんですけど、主人は4月に心筋梗塞であの世に行ってしまったんです。私たちを残して」アンナはコクンとうつぶいてしまった。監督は突然の暗い話にどうリアクションしていいか戸惑ったが、話題を変えて、アンナの気持ちを明るくしようと考えた。アンナは本来明るい性格で、気持ちを切り替えるのは得意であった。アンナはこの明るい性格で一躍AVスターになった。

監督は手をポンと叩くとアンナに笑顔を投げた。「いま、スパイ映画を撮影しているんです。アンナさん、特別出演してはどうですか。アンナさんぴったりの役を作りますよ」監督は女優への復帰を促した。アンナは一瞬微笑んだが、すぐにお腹に手を当て、落ち込んだ表情を作った。「もう、いまさら、ダメですよ。こんな体を人前にさせないわ。ハリもないし、線も崩れてしまったし、ただの、おばさんです。気持ちだけ、ありがたく頂戴いたします」アンナは残念そうに気落ちした声で静かに話した。

左横のアンナの耳に口を近づけると監督は小さな声で話を続けた。「アンナさん、AVに出てほしいといっているんじゃないです。映画ですから、裸を見せなくていいんです。安心してください」監督は映画女優としての出演を促した。アンナはしばらく黙っていた。AVであればやるべき仕事のイメージが湧いたが、映画となると一体どんなことをすればいいかピンとこなかった。

アンナは監督を見つめると不安そうに話し始めた。「本当に、アンナでもできるんですか？」アンナはもう一押しの励ましを求めた。「アンナさん、できます。自信を持ってください。アンナさんの美貌と明るいキャラがあれば、もう一度、スターになれますよ。一緒に、やりましょう」監督はアンナの決意を促した。暗い影がアンナの顔からすっと消えた。アンナは顔をきりっと引き締めると力強く返事した。「やります。是非、やらせてください」アンナは笑顔を作り、さやかと亜紀の顔を見つめ、了解を求めた。

さやかは右横の亜紀の肩をそっと抱きしめて話し始めた。「ママが女優をやるって。亜紀ちゃんは賛成かな？」さやかは亜紀の気持ちを確認した。亜紀はきょとんとした表情で訊ねた。「女優になるってことは、東京に行くの？」亜紀はアンナと離れ離れになるのではないかと心配した。監督は亜紀に顔を向けると返事した。「亜紀ちゃん、事務所は福岡だし、ほとんど、福岡で撮影するんだ。たまに、ロケはあるけど、ママと亜紀ちゃんは、これまでと一緒にだよ。まったく、心配要らないよ」監督は亜紀を安心させるため、わかりやすく説明した。

亜紀は笑顔を取り戻すと、大きく頷いた。「ママ、頑張っ」亜紀はアンナを励ました。話に花を咲かせているとライブまで1時間をきっていた。早めの食事を取り、みんなはライブを聞いて帰ることにした。5時になるとシンガーソングライターの野笙子がギターをかけかえて颯爽と登場した。弦が弾かれるとパワフルな“スタートライン”の歌声が、みんなの未来を応援するかのよう、場内いっぱい響き渡った。